

関連学会印象記

ヨーロッパ心臓麻酔学会印象記

European Association of Cardiothoracic Anaesthesiologists: EACTA

野村 実*

7th European Association of Cardiothoracic Anesthesiologists (EACTA) は、Maastricht 大学 Simon de Lange 教授主催のもとに、Maastricht で6月9日より12日まで開催された。Maastricht は、オランダ南部のベルギー国境沿いにあり、中心部をマース川が流れている風光明媚な町であり、EC 蔵相会議などが開催された MECC コンgressセンターが会場であった。今年は、The World Association of Cardiac Thoracic and Vascular Anesthesia (WACTVA) との合同シンポジウムであり、非常に高いレベルの演題が多かった。

初日の WACTVA のシンポジウムでは、連続心拍出量測定装置などの血行動態のモニターの必要性、低心拍出量症候群の薬物治療、胸部外科手術患者の栄養管理や輸血に関してなどが催された。食道エコー (TEE) のセッションでは、Albert Einstein Medical College 教授の丘先生等により、現状での TEE の役割や心内膜の autotracing、画像の立体化等の TEE の将来像が示され、意義深いシンポジウムであった。Guest Lectures では、心臓麻酔の権威である JA Kaplan 教授の“A WORLD WIDE PERSPECTIVE OF CARDIAC ANESTHESIA”が素晴らしく、心筋虚血の TEE における現状と限界を明らかにし、ST トレンドモニターが TEE の欠点を補う可能性があることを示唆した。また、EACTA と WACTVA の合同の Workshop として行なわれた、The Management of Dysrhythmias では、人工心肺後の心筋細胞の異常が組織レベル

で解明され、人工心肺中の心筋保護の方法などについて、麻酔科医も知識を深めるべきであることが痛感させられた。

日本からは、当教室の長沢、内田が、それぞれ sodium nitroprusside の冠動脈狭窄犬に及ぼす影響、および、心筋症患者における食道エコーの有用性についての発表を行なった。会場では、発表内容以外にセボフルレンについての質問も多くあり、セボフルレンについての興味は大きいようであった。他の発表では、本邦ではまだ発売されていない、Phosphodiesterase inhibitor (amrinone, enoximone) の作用についての報告があり、興味深かった。また、循環動態の評価としては、右心機能についての演題が多く、特に、心臓移植後や肺高血圧症例に対する右心不全の早期発見、早期治療の重要性が強調されていた。

EACTA は、ヨーロッパを初めとする様々な国が集まり、発表のポスターやスライドもそれぞれのお国柄が表現されていた。また、口演の進行は非常に速やかで討論も活発であり、ポスターセッションでは、ポスターの位置が横長で目の高さにあるため、非常に見やすい配置であった。

EACTA は、学会の雰囲気も家庭的であり、アメリカの Society of Cardiovascular Anesthesiologists と並ぶ世界的な心臓麻酔学会であり、本邦からの発表も多く望まれる。次回はスイスのチューリッヒで1993年4月13-16日に行なわれる予定である。

*東京女子医科大学麻酔学教室